品質は語る・・・・・
白松がモナカ本舗

漱石羊羹

数量限定

漱石の好んだ
ピーナッツと紅茶。
二つの味を漱石の
好物だった羊羹に。

販売価格
1,450円

紅茶

ピーナッツ
落花生

※表示価格は消費税込みです。

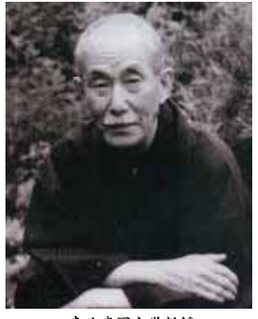
漱石生誕150年　仙台と夏目漱石

漱石の蔵書のほとんどは
東北大図書館にある

戦火が激しくなった昭和19年、明治の文豪夏目漱石（1867～1916）の貴重な蔵書や日記、手帳など約3,000点が、東京の「漱石山房」から仙台の東北大学に移されました。これらの資料は「漱石文庫」と名付けられ、漱石研究に役立てられています。生誕150年の今年、東北大学附属図書館と白松がモナカ本舗ではこれを記念し漱石に関わるコラムを連載します。

愛弟子の小宮豊隆、蔵書を守るの巻

漱石センセイを巡る物語　―その⑧―


東北帝国大学教授
附属図書館第5代館長小宮豊隆

漱石がこの世を去ったのは大正5（1916）年のちょうど今頃、11月9日のこと。胃潰瘍の悪化が原因で、「漱石山房」と呼ばれた早稲田南町の自宅で亡くなりました。49歳の早過ぎる死でした。

すでに文豪として高名だった漱石の葬儀は12月12日、青山斎場で営まれ、28日に南池袋の雑司ヶ谷墓地に埋葬されました。

漱石の死後、漱石山房や蔵書などの遺品を後世に残そうと、情熱を傾けて奔走したのが2人の弟子でした。のちに東北帝国大学の教授となり、同図書館長を務めた小宮豊隆と、漱石の娘婿となった松岡譲です。

「漱石山房」には、若き日の寺田寅彦、鈴木三重吉、芥川龍之介など、文学史にその名を刻む、キラ星のような門下生が数多く出入りし、漱石を囲んで文学論を戦わせていました。

そんな弟子たちの中でも、2人は特別と言っていい存在。松岡譲は晩年の門下生ながら、漱石が没して2年後、長女の筆子と結婚して身内となりました。

小宮豊隆は、漱石が処女作「吾輩は猫である」を世に出す頃からの、古参の門下生。豊隆の叔父がロンドンで漱石と同じ下宿に住んでいたことから、漱石の知遇を得、学生時代から夏目家に出入りするようになったのでした。

漱石と豊隆の間には、長くて深い師弟関係がありました。漱石は、豊隆をモデルに小説「三四郎」を著していますし、漱石への敬愛強い豊隆も、漱石没後、漱石全集の編集、詳細な伝記「夏目漱石」（1938年）、作品の解説をまとめた「漱石の芸術」（1941）などを著し、漱石神社の神主と呼ばれるほど漱石研究の第一人者となりました。

夏目漱石
【慶応3年(1867)
～大正5年(1916)】

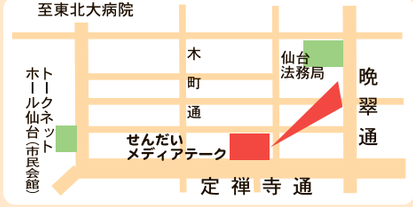
それにしても、なぜ漱石の蔵書類が、東北大学附属図書館に収められることになったのでしょう。漱石山房の移築保存を考えていた松岡譲と小宮豊隆ですが、その実現は思うように進まず、とうとう昭和20(1945)年の東京大空襲で、漱石山房が焼けてしまいました。

しかし幸いなことに、蔵書や自筆の文書などは焼失をまぬがれました。その直前の昭和18（1943）年暮れから19年2月にかけて仙台に運ばれ、東北帝大図書館に一括して収蔵されていたからです。豊隆は大正14（1925）年、東北帝国大学法文学部教授となり、後には東北帝大図書館長にも就任。蔵書を「文庫」として残すために奔走します。それは遺族の意に叶う保存のあり方でした。

3000点あまりの「漱石文庫」には、漱石の書き込みが残る洋書約1650冊、和漢書約1200冊を中心に、日記・ノート・試験問題・原稿等の自筆資料なども。まさに人間、漱石を知る手がかりです。愛弟子豊隆の、情熱と執念の賜物と言って過言ではありません。

■夏目漱石生誕 150周年記念特別展示
「夏目漱石～その魅力と周辺の人々」
（主催：東北大学附属図書館・共催：仙台文学館）
漱石文庫や仙台文学館の資料から、選りすぐりの品々を展示。文豪漱石を身近に感じられます。

日時：11月14日（火）まで10時～17時（入場無料）
会場：せんだいメディアテーク5階ギャラリーa
（仙台市青葉区春日町2-1）



季節の上生菓子
『七五三』
和菓子せっと

ご成長のお祝に
1函3個入 570円
数量限定
※表示価格は消費税込みです。
直営店にてご用命をお待ち申し上げております。

君菓
白松がモナカ
白松がヨーカン